

P2-69

赤十字 5 看護大学によるテレビ会議システムを活用した大学院遠隔授業

日本赤十字北海道看護大学 看護学部¹⁾、日本赤十字豊田看護大学看護学部²⁾、日本赤十字秋田看護大学看護学部³⁾、日本赤十字広島看護大学看護学部⁴⁾、日本赤十字九州国際看護大学看護学部⁵⁾

○^{かわぐちて る こ}河口てる子¹⁾、^{なかにし 実代子}中野実代子¹⁾、^{いし 崎 智子}石崎 智子¹⁾、^{にし 西片久美子}西片久美子¹⁾、^{ねもと 昌宏}根本 昌宏¹⁾、^{にし 大西 文子}大西 文子²⁾、^{やまの 典子}山田 典子³⁾、^{まづき 眞崎 直子}眞崎 直子⁴⁾、^{よしたけ 本田多美枝}本田多美枝⁵⁾

赤十字6看護大学では、平成26年度に専用回線を用いたテレビ会議システムを導入し、平成28年4月からは大学院共同看護学専攻博士課程が、赤十字5大学（日本赤十字北海道看護大学、日本赤十字秋田看護大学、日本赤十字豊田看護大学、日本赤十字広島看護大学、日本赤十字九州国際看護大学）において開設され、協力校である日本赤十字看護大学とともにテレビ会議システムおよびインターネット回線を用いたスマート会議システムで遠隔授業・個別指導を実施している。この共同教育課程では、学生はどの大学にいてもテレビ会議システムにて5大学提供の授業を受けることができ、また個別指導を受けることができる。さらに、インターネット回線を用い、大学外からパソコン・タブレット・スマートフォンなどを使い、テレビ会議システムゲートウェイを通して遠隔授業を受けることができる。この博士課程は、初年度14名、2年目14名、3年目10名の入学生を迎え、共通科目9科目、専門科目1科目、合同ガイダンスおよび合同研究セミナーをテレビ会議システムおよび大学外からも授業を受けられるインターネット回線を用いた遠隔教育で行っている。また5大学における共同看護学専攻の会議はすべてテレビ会議システムで行われている。2.5年間の教育実践から、その具体的な利便性、有益性、課題を明らかにし、教育効果の一端と基礎的データについて報告する。

P2-71

病院事業における赤十字講習の活用を考える

石巻赤十字病院 医療社会事業課

○^{たかはし ようこ}高橋 洋子

【はじめに】H28年より健康生活支援講習講師となり、宮城県支部と連携し赤十字講習の普及活動強化に取り組んだ。講師の役割は、「指導員の養成・育成」・「講習普及の実践」であり、院内の講習普及活動も大切な役割である。職員は、赤十字講習の内容の詳細を知らないものが多い。そこで、院内で赤十字講習に身近に触れる機会を作り、赤十字講習の普及・理解を図るため、病院事業の中で赤十字講習の活用を考えた。【取り組み】施設の赤十字講習の活用の先行事例を参考に、当院の実情に合った赤十字講習の活用を関係部署に提案した。【結果】定例の赤十字講習の他に、がんサロン・看護助手研修・職員対象の認知症サポーター養成講座・病院健康まつりに活用し、赤十字講習の院内開催数は、増加している。地域医療連携とは、がんサロンで、「癒しのハンドケア」を実施。看護助手研修は、看護部と連携し、「健康生活支援員養成講習」を実施し、46名の支援員を養成している。また、新人看護補助員には、「基本技術の習得」と「赤十字講習について」を、オリエンテーションに組み込んだ。認知症ケアチームと共に、「認知症にやさしい病院」を目指し、認知症サポーター養成講座を4回実施、149人の職員が受講した。今後も全職員・看護学生対象に実施予定である。健康まつりは、体験を通した救急法等PR活動を毎年実施している。病院内で赤十字講習のPRの機会も増え、指導員希望者も少しずつ出ている。病院事業の中で赤十字講習の普及を推進するには、各部署との連携が不可欠である。先行事例を参考にさらに院内での活動を続けていきたい。

P2-73

新人看護職員評価表を活用した人材育成支援

石巻赤十字病院 看護部

○^{いとう 恵み}伊藤 恵美

【はじめに】近年、レジリエンスが低く職場適応ができずに療養や離職につながる新人看護師が増加している現状があり、新人教育におけるメンタルヘルスへのサポートの重要性を感じている。今回、生活面・精神面の状況・職場への適応状況の把握を項目とした評価表を活用し、新人看護師の育成支援に取組んだ。【方法】新人看護師を対象に、エルダー看護師が「新しい役割・生活への適応」「知識・技術・判断の獲得」「心理状態」「全体的な印象」の4項目において、根拠と対応策を含め毎月評価。集積データと分析結果は管理者やエルダーにフィードバックした。【倫理的配慮】評価結果は個人が特定されないよう配慮した。【結果・考察】新しい役割・生活への適応は、月日の経過と共にA評価が増え、役割意識が高まり徐々に社会生活への適応が可能になったことを示した。日勤独り立ちの時期である6～7月と夜勤独り立ちの時期にあたる9～10月に、知識技術の獲得及び心理状態の評価が低い結果となった。これは、知識技術の獲得が不十分な状況に、新人のレジリエンスや自己効力感の低さが影響し、メンタルヘルスの不調をきたしていると考えられる。9月は夜勤の独り立ちができている新人とメンタル不調から病気休暇となる新人に2極化された。客観的に新人の状況を評価することで新人の傾向がわかり、個々に合わせた指導やサポート方法を検討する機会となった。また、評価結果を教育担当者や部署管理者と共有することで、メンタルヘルス不調者に対してタイムリーな産業医の介介に繋がった。【結語】評価表の活用により客観的に新人看護師の状況把握ができ、必要な指導や介入ができた。ストレス反応は、認知のあり方、社会的支援の有無、対処法の影響を受けて増減するとされている。今後も、評価表を基にPDCAサイクルを廻し、人材育成支援に努めたい。

P2-70

夏休み課題「妊娠・出産・育児関連おもしろレポート」での学生の学び

諏訪赤十字看護専門学校 教務部

○^{こばやし さちこ}小林咲智子、田村 奈々

【背景】看護学生は妊産婦や子どもと接する機会が少なく、看護の対象としてイメージしにくい。3年次の母性・小児看護実習時までに対象のイメージ化をはかりたいが、講義形式の授業では難しいと感じている。講義形式の授業では無く、学生自ら興味・関心のある内容を楽しく、自由に学べる工夫を考えた。そこで、比較的時間がある夏休みの課題として「妊娠・出産・育児関連おもしろレポート」を考え企画した。【実際】2年次の夏休み前に、課題のオリエンテーションを行った。マタニティ用品、育児用品の実際、妊娠・出産・育児の実際の調査等、母性・小児看護に関連した自分の興味がある内容を自由に選択し、自由に表現してよい旨を説明した。課題として提出されたものは、自分の出生時の様子を家族にインタビューしたものの、友人・知人の妊娠生活、子育て事情の様子、最近の便利な育児用品についての調査等が多かった。課題提出後、成績等に影響しない旨を説明し自由記載で夏休み課題に対するアンケートを実施した。【まとめ】自分の興味関心がある内容を自分で決定し、課題に取り組むことにより、「母性・小児看護のイメージがついた」と回答した者が90%と大多数であった。また、「看護の対象としての興味関心が持てた」と回答する者も86%であり、「楽しい」「実習が楽しみになった」との反応が得られた。さらに、出生時の様子や育児生活について調査した学生は、看護学生として授業を受けながら自分の生まれてきた背景を知る機会となり、今までに学習してきた内容と合わせて学習ができている。また両親への感謝の気持ちや自分が大切に育てられた存在と気づけている。

P2-72

他機関との合同学習会の取り組みについて

諏訪赤十字病院 医療福祉課

○^{こばやし ちか}小林 千夏、藤森 友章、大島 春江、上條 奈奈

【目的】諏訪赤十字病院医療福祉課は、同一2次医療圏内のA病院医療福祉相談室、B老人保健施設と設置主体の垣根を越えて、定期的に学習会を行なっている。この取り組みも今年で10年目を迎えたため、学習会に対する期待と得られる効果を考察し、今後の活動継続と改善に繋げていく目的でこの調査を行なった。【方法】当院SW8名、A病院SW4名、B老人保健施設SW2名の合計14名にアンケートを実施した。アンケートの内容は頻度や所要時間など開催形式に関すること、内容への満足度、積極的に参加できているか、学習会へ期待すること、学習会から得られる効果について、5段階の評価で行なった。【結果】A病院及びB老人保健施設の群（院外群）と諏訪赤十字病院の群（院内群）の2つに分けて比較検討を行なった。学習会への満足度については院外群4.17、院内群3.25という結果であった。また、参加の積極性についても院外群4.83、院内群3.00とこれも院外群が院内群を大きく上回った。学習会の内容に関する期待は、「他院の状況を知る」と「連携強化」の2項目に対して高い期待が寄せられることがわかった。効果についても上記2項目が高い評価となっており、一定程度参加者の期待に応えられていることが分かった。期待と効果に解離がある項目は「スキルアップ」と「困難ケースの解決」の2項目であり、ソーシャルワーク技術の向上に関してはあまり着たに伝えられていない。【考察】今回の調査を通して、当院MSWの学習会への参加意識や満足度が低いことが分かった。開催時間や頻度、所要時間にも不満が見られたので検討が必要であると考えられる。内容に関しては当初の目的であるソーシャルワーク技術の向上への作用はあまり感じられていないため改善の必要があると考えられる。

P2-74

新人教育に関わるスタッフ間でのフォローノートの有用性

長野赤十字病院 看護部

○^{くらし あすか}倉石 飛鳥、小林 美佐、山岸 滯、吉原 由華

【研究目的】A病院B病棟では新人指導を行う中で、フォロースタッフ間での情報共有の場がなく統一した指導ができていないことや、スタッフの新人教育に対する意識の差が問題とされていた。今回フォローノート（以下ノートとする）を使用したことで新人指導の意識や指導内容に変化があったのかを調査し、ノートの有用性を明らかにするために本研究に取り組んだ。【方法】新人指導の際にノートを使用したスタッフにアンケート調査を実施した。【倫理的配慮】A病院看護部の承認を得た後、対象者に文書にて説明し回収をもって同意とした。【結果】ノートを使用した看護師21名に配布し回収率は42.8%であった。ノートを使用し情報共有ができたという回答は77%であった。またノートを使用し良かった点・悪かった点をカテゴリに分類し考察した。【考察】アンケートよりノートを使用したことで日々の新人の状況が把握しやすくなり、ポイントを絞った継続した指導が行えるようになった。一方でノートだけでは伝わらない情報もあり、文字だけでは伝わらない部分を補足する方法を検討する必要がある。ノートを使用することでフォロースタッフの中には新人指導に対する責任感が生まれ意識の変化につながった。また自分以外の指導の様子を知ることができ、自分の指導を振り返り他者の指導方法を参考にするなどスタッフ全体の指導のレベルアップにもつながった。今回のノートは新人に了承を得て使用した主にプリセプターとフォロースタッフ間のみで使用していたため倫理的問題と、フォロースタッフの記入に対する負担が課題としてあがった。今後新人も含めたノートの運用を検討する必要がある。【まとめ】病棟全体で新人指導をする中でノートは有効なツールの一つといえる。

11月15日(木)
一般演題(ポスター)
抄録